
嗜癖，神，性愛

「中高年ひきこもり」の理解に向けて

斎藤 学著

金剛出版，A5判 376頁，4,620円，2026年2月刊

（京都ヘルメス研究所・京都大学名誉教授・
第19期日本学術会議会員）山中康裕

大変な本である。何が、大変かといえば、著者や題名や本書で対象としている「中高年ひきこもり」が大変だというのではない。まず、本文冒頭を引用してみる。

無意識の発見とは即ち、意識の発見のことである。意識とはa priori（前提的）に存在するものではなく、散乱する感覚の破片が、何らかの状況下で一定の活動を強いられた時に、突然生じる主体のことである……

から始まる著者の思考は、まず、Lacan, Jackの提出した「鏡像段階（le stade du miroir）」の論攷から始まって、Freud, Sigmundの「意識（das Unbewusste）」を嚆矢とする心理学体系の、結局はわれわれ（木村敏・中井久夫監訳、筆者は第9章90頁を下訳）が訳した、Ellenberger, Henri Frédéricの『無意識の発見（上）（下）（The discovery of the unconscious）』を大向こうに、大上段から「意識の発見」論を展開しており、物凄く、creative・意欲的・挑戦的な、大議論を発しているのであるから……。

さて、本書冒頭の「まえがき」に戻って引用してみると、

いつ頃からそうなったのか、はっきり覚えていないが、過去、現在、未来という時間の流れが当たり前だと、私には思えない……

から始まることからして、常に、哲学的・挑戦的・かつ根源的な「問い」を発する著者は、何と、これまで評者は迂闊にも全く彼を意識してこなかったが、彼も、1941年生まれで慶應義塾大学医学部卒とあるから、われわれは、第2次世界大戦の日米戦争の

開戦前、つまり、戦前生まれの、全く同世代の人間である。経歴を見れば、フランス政府給費留学生とあり、何度かアメリカに出かけて、あちらで精神科臨床に精出しているようであるから、仏語・英語に達者で、真に global な、その点では全く両言語とも達者でない評者から見て羨ましい限りの語学力と思考力の保持者であるが、やはり、評者も、考えはいつも global なつもりなのではあるが……。

さて、結局は、著者は、「ひきこもり」を、依存症の一つとして捉え、アダルトチルドレン論からの独特の思考からの洞察が語られ、かくして、家族の崩壊から、「個族という宗教」が人々に齎す深い影響を浮かび上がらせ、冒頭に記したような、心理学・精神医学における根本問題を、順々に、解いていく形をとっているのだ。
